南ア・早川支流　保川南俣

遡行日 08 年 6 月 28～29 日
メンバー：三井（L、記録）
　　中島（ぶなの会）、栗原（とまの風）

今回、「ぶな」の中島さんと「とま」の栗原さんの参加を得て、懸案の「保川」を遡行した。結果的には源頭手前辺りからエスケープし、尾根から下山する事になってしまったが色々感ずる事があり、有意義な山行だった。まず行動記録を。

［第一日］
前夜、三井宅に仮泊。早朝出発し、富士川沿いに北上する。
今回の山行は先週行う予定だったのだが大雨で延期にしたものだ。その後も梅雨時の今、ぐずついた一週間だったので果たして川がどの程度減水しているか気がかりだったが（おととしの事、やはり中島さんと南アの某沢に行った時同じような状況で、その時は全く減水しておらず、出合いからスゴスゴ引返した事があった。）幸い、まだ平水ではないがあまり濁りもなく、これなら行けそうで安心する。
一時間半ほどで出合いに到着。朝食、沢の支度を済ませ、保川沿いの林道を歩きだす。
30 分ほどで支流（車沢）を右に分ける。
林道はその支流沿いについているのだが、我々はここから入渓とする。
今日どこまで行けるか、それによっては明日の行動が変わってくるのでのんびりとはしていられない。河原の石を飛び跳ねるように越え、右に左に渡渉して進んでいく。水量は深くて腿位だが平水に戻っていないようで、流れも速めで注意を要す。計画書では下山は再度この沢を戻る事になっているのだが、明日の予報が雨なのでこれ以上水位があがると渡渉が厄介になり、まずい事になりそうだ。
沢はところどころに大釜のトロがあったり、滝も落差の割には水量豊富で、意外にその渓相は悪くない。
昭和 60 年代の初頭頃にはこの保川に沿って登山道があり、笊が岳に直接登れる貴重なルートとなっていたのだが、とうの昔に廃道となっている。
実は今回の山行ではこの廃道が幾らかでも使えればそれを利用して二俣までの時間の短縮を狙っていたのだが、文字通りの廃道で、部分的に石垣などで組まれたものが残滓のように残っているだけだ。
沢は遡行自体は別に困難な事はないし、結構いいペースで歩いているのだが大岩の転石帯などがあり、それをのし上がって越えていくのは結構しんどいし、はかどらない。
途中、休憩している単独行の釣師と出会う。まだ竿をだしておらず（道理で足跡を見つけたのに追い付かなかった訳だ。）、二俣付近で泊まって釣るという。で、お節介ながら「明日は天気が悪いようなので沢の下降はヤバイかもよ。」と忠告して先に進む。
沢はずっと両岸の狭まった地形になっていたのだが、間もなく広河原状になって沢は開ける。漸く二俣にでた。
当初の計画では、北俣を遡行して沢下降の予定だったが、明日の天気が芳しくないので沢の下降はまずいと判断。南俣を遡行して尾根を下降することに変更した。
南俣に入り暫く行くと 20ｍの滝。直登は無理で、右岸から最初栗原さんが空身で一段登り、僕がやはり空身で更に一段上って、最後は中島さんがロープをつけて登ってこの滝を越える。
その先にも１０ｍほどの直瀑。これは右から直登できた。
二俣に入ってから渓相がガラリと変わって滝が続いて面白くなってきた。「やっぱ、沢はこうでなくちゃね。」
ランカン尾根の 2261ｍの小ピークに上がる枝沢を過ぎると再び狭隘なゴルジュとなり、

連瀑が懸かっている。直登できる代物ではなく、右岸から巻きにかかるが、被り気味の垂壁に囲まれていて弱点が見出せない。と、なると少し戻って左岸から巻くしかないか…。しかし、そうなるとかなりの大高巻きになるな…。などと考えていると、栗原さんから「エスケープを考えませんか。」の声。
確かにここを巻いたところで本日は時間的には一杯だろう。明日このゴルジュを抜け、稜線に上がるのにどれだけ時間がかかるか見当が付かない。
元々今回の計画では下山ルートにいいルートがなく、考えているランカン尾根にしても踏跡なしの長大な尾根で、結構時間がかかりそうで、しかも明日はほぼ確実に雨なのだ。ならば早めにランカン尾根に上がる事を考えた方がいいかも…。
中島さんはまだ続行の気だったようだが、強いて異論は挟まない。
「エスケープ」となれば先ほど過ぎた2261ｍのピークに上がる枝沢を詰めるのがベターだ。すぐさまその枝沢まで戻りツメ始める。
暫く登ると水が涸れ始めたので「これまで。」右岸側の樹林帯となっている斜面を登ってツエルトの張れそうなところを捜す。どうせ快適な所などないのだが、それでもマズマズの所をゲット。
中島さんは湿気た枯れ枝を集めしぶとく焚き火。小さな焚き火を囲んで話し込むが、僕はどうにも眠くて…。
ツエルトに潜り込んだ辺りから小雨がパラついたが、夜半からは雷はゴロゴロ、雨はザーザーで、「尾根に逃げていてよかった。」

［二日目］
３時起床、5 時出発。雨が降り続いているが樹林帯の中という事もあってそれほど気にならない。中島、栗原さんはぐんぐんと登って行くが今の僕の体力ではとても追いつかない。2 時間ほどで 2261ｍの小ピークに出、ランカン尾根を下降する。
南アの尾根は大体そうなのだが、踏跡はなくても藪が薄いので藪漕ぎは越後あたりから比べると格段に楽だ。
それにランカン尾根は、登山道の類はないが笊が岳に直接登る尾根として南アの藪漕ぎ派の登山者には知られていて、登る人はいる。
（僕も３０年も前になるが一度登った事があった。）
踏み出してみるとやはり薄っすらとした踏み跡はあるし、赤テープも所々にあって沢屋には決して厄介な尾根ではない。と言っても長大な尾根なのだ。歩いても歩いても高度を下げない。3 時間かかってまだ 1827ｍのピーク。あと 1400ｍも高度を下げなければならないのだ。（何やらあの相模尾根みたいだが、ランカン尾根はずっと樹林の中なのでましか。）
今回のこの尾根の下降は、僕にとっては今後の登山活動の可否を問うほどに重い意味がある。ヒザの手術後何回か山行はしているが、ここまできつい下りはなかった。この下りで僕のヒザが悲鳴を上げるような事になれば、今後は大きな沢は無理、という事になる。
二人は絶えず地図を確認して着実にルートを確定して下って行き、僕は自分に許されるペースで後を追って下るしかない。
長い尾根だった。昔の登り口（だったと思う。）白石の神社に着いたのは下り始めてから 7 時間を要した。ただこれは僕のペースに二人が合わせてくれたからという事もあろう。二人だけだったら 1 時間や 2 時間位詰められたかも知れない。
そういう意味でお二人には申し訳なかったし、感謝もしている。
ただ自分的にはこの長い下りに何とかヒザが持ってくれたので、今後の山行にある程度の目処はたったかな、という思いもある。
いつしか雨はあがっていたが、目の前の早川は昨夜からの雨で大増水して赤茶けた水が沸きたった様に流れている。あの釣師は無事下

山したのだろうか。

・・・・・・・・・

今回の保川は記録資料が全くなかった。「登山大系」にも載ってないしWeb検索しても出ない。
全く沢のエリアとして未開ならともかく、そうではないところで記録がないという事は、大抵その沢が「スカ」の場合が多い。で、僕もこの流域の沢は大体遡行していたのに保沢は全くノーマークだった。それが去年の会の「春の集中」の時、釣さんPが入渓し、かなりてこずったと事を知り俄然気になってきて、「行ってみよう。」という事になったのだ。
結果はご覧の通りだ。二俣までのしんどい河原歩きに長い下山路。マー、「スカ沢」とは言えないが「疲れ沢」（造語です。）とでも言おうか。
ただ肝心のゴルジュを抜ける手前でエスケープしてしまったので悔いが残る。

・・・・・・・・

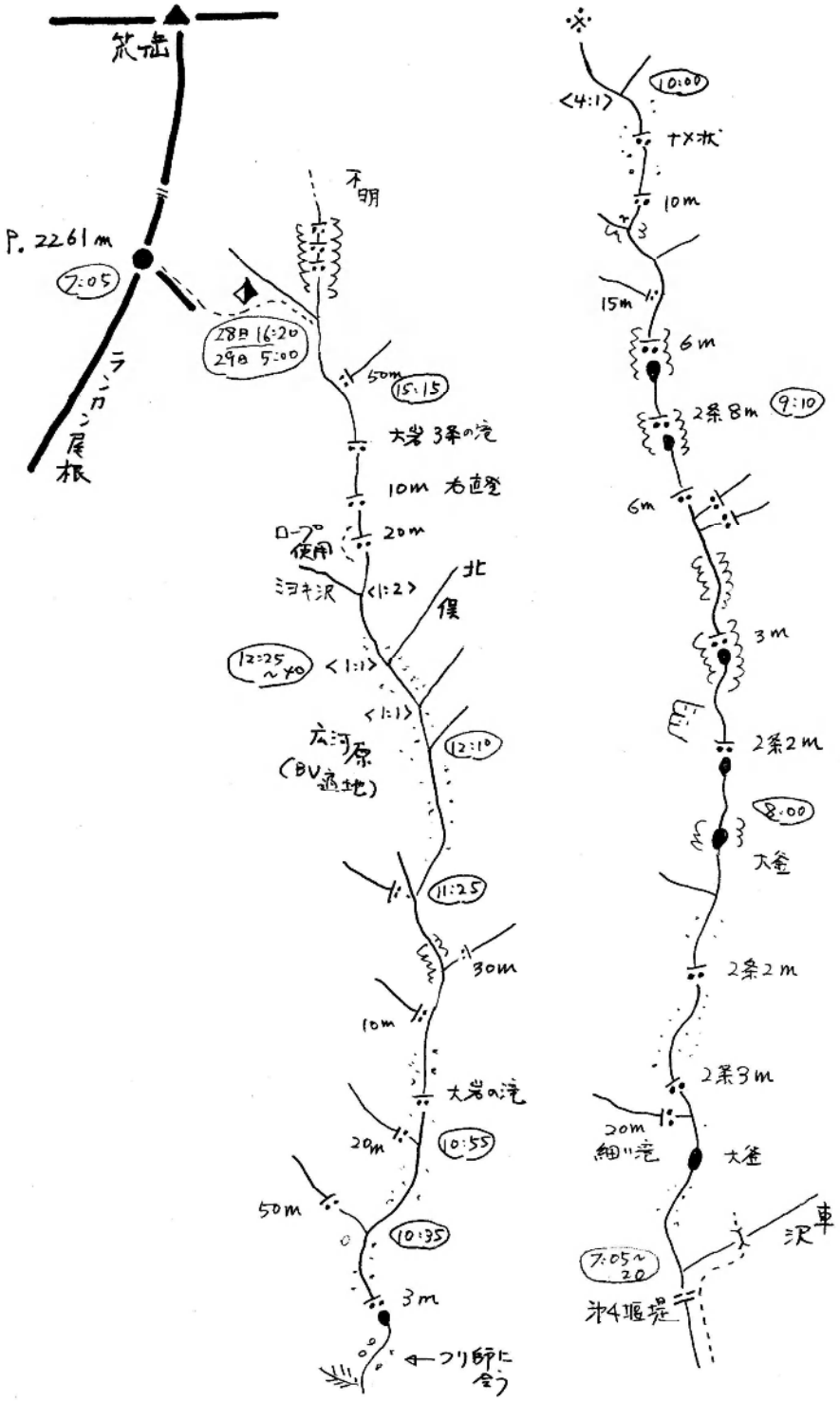
今回は「さがみ」「ぶな」「とま」のジョイント山行のようになってしまった。
僕は他会の人と山行する事は結構好きだ。それはそれぞれの会や会員個人に独自のやり方があって興味深いし色々参考になる事も多い。
僕が「山友会」に入った時もそんな事が幾つかあったが今回は「とま」の会員の方との山行は初めてだったがやはり「とま」独自の考え方、運営方法とかが聞けて興味深いものだった。
例えば共同装備のロープだが「とま」では山行には必ずロープは２本共同装備とするとの事で今回、計画書では１本だけだったものを２本に変更した。
まー、ロープは２本あれば何かと心強いのは確かだが２本なくてはならないのかその辺は議論の余地はあるが。
ただ、「とま」はロープは 8ｍｍ×30ｍが標準だそうでそうなると２本必携という事も肯ける。
その他、車の燃料費の精算方法とか色々「へー。」という話しがいくつかあって興味深かった。

・・・・・・・・

「沢登り」を活動の柱に置いている会はいくつかあるが多くの会が（老舗の会が特に。）活動が低迷というかやや低調という気がするのだがその中にあって「とま」は僕の目からは創設時からずっと堅調な活動を維持しているように思う。（年報の充実振りをみればうなづけよう。）
その会で活動している栗原さんだからだろうが沢の力量は素晴らしいもので感心させられた。（上から目線の言い方で恐縮だがコレも年の功、という事で…。）

・・・・・・・・

保川の源頭部は不明のままでこのままでは正直、心残りなのだが、と言って僕としては限られた遡行リストの中に再度「保川」を入れる気に今はなれない。
いつかまた保川に行く気になる事はあるだろうか。



08年6月28~29日
南アルプス 早川支流 保川南俣